

氏名 齋木 栄夫
 学位(専攻分野) 博士(文学)
 学位記番号 論文博第372号
 学位授与の日付 平成11年11月24日
 学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
 学位論文題目 カントの方法
 —— 思惟の究極を求めて ——

論文調査委員 (主査) 教授 伊藤邦武 教授 藺田 坦 助教授 福谷 茂

論文内容の要旨

本論文は、筆者が「カントの思惟の究極」とみなすもの、すなわち有限な経験にもとづく「人間の立場」を、とくにカントの「思惟の方法」に焦点をあわせることによって浮かびあがらせようとする試みである。筆者によればカントの方法とは、「経験一般の可能性の条件は、同時に、経験の対象一般の可能性の条件である」という周知の命題に典型的に示されるような立場を生みだすような方法として特徴づけられる。そして筆者の解釈では、この命題こそはカントの思惟の究極であるとともに、「経験の対象を前提としてはじめて認識しうるその可能性の条件が、かえって経験一般の条件として対象に論理的に先行する」という、逆説的な事態を明らかにしているのであり、このことは、まさに有限である人間の認識の究極をも指し示しているのである。したがって、カントの思惟の方法とは人間の認識の究極においてあらわになる状況を捉える方法である、というのが筆者の論考の中心的な主張である。筆者はこの方法について、それがカントの理論哲学および実践哲学の随所において見られるとともに、そのことが有限な人間の立場にたつカント哲学の根本性格を照らしだすことになっていることを、本論文の各章をつうじて論証している。

論文全体は、簡潔な「はじめに」と「おわりに」にはさまれて、それぞれ「方法」、「存在」、「空間論」、「道徳について」と題された四つの章からなり、各章は三ないし二つの節に分かれている。

筆者の目標にとって重要な役割をはたす第一章第一節では、経験一般の可能性にかんする上記の命題とともに、『実践理性批判』における自由と道徳法則をめぐる命題と、『純粹理性批判』の「超越論的方法論」における超越論的命題と経験とをめぐるカントの指摘がとりあげられ、これらのあいだの同型性が確認される。そのうえで筆者は、存在根拠と認識根拠との同時的な成立の関係を、カント的な用法における「前提」概念の意味であると解釈し、それが結局認識論の可能性自体にかかわるものであるがゆえに、「超越論的論証」と呼ばれうると見る。筆者はこの理解にもとづいて、超越論的論証にたいする懐疑論と循環論の嫌疑がしりぞけうることを主張する。

第二節「カントと分析性の問題」筆者は、アプリアリな総合判断の成立いかんを問うために必要とされる、総合判断と分析判断の区別の可能性について、現代の分析哲学における諸理論(クワイン、カルナップ、パトナム、カツ等)を援用しながら、カントの立場を擁護しようとする。

第三節「因果的必然性—ヒューム、カント、反事実的条件文」で筆者は、ヒュームの恒常的随伴性にあきたらず、因果律に超越論的な原則という地位をあたえたカントの解決を、さらに徹底することを試みる。すなわち筆者は、「経験法則の实在根拠が物自体にあるからこそ、経験法則に必然性を認めうるのではないであろうか」と主張する。そのために筆者は、実践哲学における自由と道徳法則の関係の分析を物自体と経験法則の関係についても適用することを提案する。つまり、「物自体の世界に成り立つ必然性は経験法則の存在根拠であり、経験法則は物自体の世界に成り立つ必然性の認識根拠である」ということである。しかし、この主張は筆者も認めるように、物自体への言及を含むという意味で、カントの理論哲学の枠をこえた主張である。そこで筆者は、分析哲学における反事実的条件文の解明を援用し、そこで問題にされる条件文の前件と後件の「つながり」が、真理関数的含意とはことなつた、「知覚をこえた存在の次元」をあらわしていると解釈する。この「つ

ながら」こそが、物自体の世界において成立する必然的な関係にはかならない、とされるのである。

以上の論考をふまえて論文の主題は、自然法則の対象となるものが「存在」するとはいかなることかという、第二章の問題に移行する。第二章第一節「カントと外界存在の問題」は、認識レベルにおいて「私の外なるもの」の所在を追求する。これは結局、「経験的実在性を有する空間の概念性ないし主観性はいかに理解されるべきか」という問題に還元されるが、筆者はここでも、カントの著作の重要箇所にならず登場する「同時に」という言葉で結びつけられた二つの条件の等置ということに、解決の鍵があると考え。すなわち筆者は、「私の外なるもの」の存在に確固たる基礎があたえられることになるのは、『純粹理性批判』第二版「観念論論駁」での、「私自身の現存在の意識は、同時に、私の外なる他のものの現存在の直接意識である」という命題においてであると考え。「私の内なるもの」と「私の外なるもの」との相互依存関係という難問もまた、このようにカント哲学の方法そのものによって解かれていると筆者は見る。

第二節「物理的実在」は、アインシュタインとボーアのあいだで交わされた有名な物理理論の完全性をめぐる論争をとりあげ、ボーアのいう相補性の原理が、カントの形式的概念枠の考えと類似の役割をもつことを主張するとともに、この原理を導いたボーアの推論そのものが、カント的なカテゴリーの演繹という観点に立脚したものであることを論証する。

第三節「ロックの Physical Inquiries と「実在」」は、カントに先行するロックとボイルの粒子論とその認識論的問題意識を彼らのテキストにそくして解釈し、それによってカントのいう超越論的観念論にして経験的実在論という立場が、いかにして要請されたのかを理解しようとするものである。

第三章「空間論」第一節および第二節は、空間論上の対立する二大学説であるニュートンの絶対説とライプニッツの関係説を、多くの典拠をもとに詳細に分析しようとしたものである。ニュートンにかんしては、その絶対空間の理論構造がグッドマンの個体算の理論を援用して解明され、それが、力学の概念枠の内部にのみ存在すると考えられなければならない、理念的性格をもつものであることが説かれる。ライプニッツにかんしては、その空間論における不可識別者同一の原理の根本性が強調されると同時に、個体化の原理が空間ではなくモナドのほうにあることが確認され、また、関係説においても空間の量的側面である距離概念を導入することが可能であることが説明される。

第三節「空間におけるカントのテーゼ」は、『純粹理性批判』感性論と分析論における空間にかんする二つのテーゼを取り上げ、それらが一見したところそう思われるような、単純なニュートン説とライプニッツ説の再論ではなくて、カントの独自の空間論の必然的な展開であり、それ自身の統一性をもったものであることを論じる。このことを論証するために、カントの前批判期以来の空間論のモチーフが確認され、そこに「形式としての空間」と「物理空間」の総合が企てられていることが論じられる。

第四章「道徳について」の第一節「行為はいつ道徳となるか」は、人々がその道徳性を養う方法は何かという問題をあつかい、そうした道徳性の開発において最優先されるべきなのは、定言命法の含意するところに気をくばることによって、道徳的行為へと方向づけられるようにすること、つまり、意志の自律を不断にもとめつづけることである、と論じる。

第二節「道徳的自律」は、カントの道徳哲学の中心的議論を、自由と道徳法則の同時的かつ相補的条件づけとしてとらえたうえで、このような方法論に類似のものが、現代のドゥワォーキンやセラーズの理論においても採用されていることを確認するとともに、とくに自律をめぐるドゥワォーキンの説との対比のもとで、カントのいう形式的自律概念の必要性が明らかになることを説明する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、「カントの思惟に即して、カントの思惟の究極を把握」（前書き）しようとしたものである。筆者のいうカントの思惟とは、その理論哲学（『純粹理性批判』）と実践哲学（『実践理性批判』）をさしているが、本論文ではとくに前者の理論哲学に重点を置いて、カントのいわゆる「超越論的観念論にして経験的実在論」とよばれる認識批判の理論を論究の中心課題としている。また、筆者のいうカントの思惟の究極とは、この超越論的観念論の根本命題であるところの、「経験一般の可能性の条件は、同時に、経験の対象の可能性の条件である」という主張に典型的にみられるような、認識の条件と存在の条件とを「同時に」という言葉で等置する認識論的方法のことである。筆者が本論文全体で主張しようとすることは、このような認識論的反省の方法についての独自の洞察が、カントの理論哲学、実践哲学全体をつらぬいているということであり、同時にそうした方法論的洞察が、カント哲学のみならず哲学的思惟一般においても、ひとつの究極的な立場をあらわしてい

るということである。

筆者はカント哲学のこの独自性と究極的性格とを論証するために、三つの角度から分析の作業をおこなっている。第一に、認識論そのものの方法論として、認識根拠と存在根拠とが同時成立することを論証しようとする態度が、カントの理論哲学においても実践哲学においても一貫してつらぬかれていることを、『純粹理性批判』の主要な主題（分析・総合の区別、因果的必然性の問題、外界の存在の論証、空間論）と、『実践理性批判』の中心的主題（意志の自律性の解明）の分析に即して示すとともに、この論証方法が循環論法におちいらない理由をカントの経験概念にもとづいて説明する。第二に、こうした論証方法が要請されることになった由来を、カントに先行するロック、ライプニッツ、ニュートンの認識論、自然哲学の展開に内在する問題意識の展開の過程から説明する。そして、第三に、上にあげた主要な主題についての現代における哲学と科学論にみられるさまざまな理論、とくに、クワイン、グッドマン、ストローソン、パトナムらに代表される分析哲学の諸理論と、物理的実在をめぐるアインシュタインとボーアの論争をとりあげて、これらとの対比において浮かびあがるカントの議論の特徴を明らかにするとともに、その現代的意義について考察する。

このように、本論文はカント哲学の方法論を論じるといっても、その分析の観点は、カントの哲学理論の内在的吟味、その歴史的背景の分析、その現代的意義の究明という三つにまたがったものになっており、論文全体の内容はきわめて包括的である。また、論述は一貫して明快な分析的記述のもとで展開されており、無用な術語上の詮索などにおちいることを極力ひかえている。本論文はこうした包括性と平明さの点で、数多いカント研究のなかでもきわだっていると考えられる。

以下、上にあげた三つの観点のもとで筆者が解明している諸論点のうちで、もっとも独創的と思われるもののみを列挙する。

(一) 人間の認識の超越論的基礎づけをおこなおうとするカントの哲学においては、経験の成立を支えるカテゴリーが存在と思惟の共通の条件となることが主張されるが、このカテゴリーの体系の唯一性を保証することは容易ではない。しかし、筆者はこの問題にかんする、現代の分析哲学におけるクワインからデイヴィッドソンへの理論的展開の成果と重ねあわせることによって、カントの立場が説得力をもつことを示している。

(二) 存在論的条件と認識論的条件とが同時的かつ相補的に成立するとみるカントの方法は、とくにその空間論において独自の思想を生み出したのであるが、この思想は一般に、カントにおけるライプニッツとニュートンの立場の総合として理解されるのがふつうである。筆者もまたこの歴史的経緯を丹念に跡づけているが、同時に、この方法論がカントの初期の形而上学においても重視されていることに注目して、カントの先行思想との関係にかんするより綿密な研究成果をあげている。

(三) カントの超越論的観念論の立場は、現代の科学論においてはすでにのりこえられたものとみなされることが多い。しかし筆者は、量子論における物理理論の完全性をめぐるアインシュタインとボーアの有名な論争をとりあげて、とくにボーアにおける「相補性の原理」の導出が、通常理解されるような実証主義や道具主義にもとづくものではなく、むしろカントのカテゴリーの導出に似た、認識論的反省の方法にもとづいたものであると主張する。このことは、ボーアの立場に対する再考をうながす斬新な見解であると思われるとともに、カント哲学の現代科学論にたいするインパクトを示唆する重要な指摘となっている。

以上は、筆者の独自性を示すとくに特徴的な主張をあげたものであるが、本論文にはこれら以外にも多くの重要な知見が含まれている。本論文がわが国のカント研究ならびに哲学一般にたいして、貴重な貢献をなすことは疑えないと思われる。ただし、筆者がカント研究の究極性を主張するために対比的にもちいている現代の分析哲学や科学論については、それがまさに現在進行中の事柄であるがゆえに、さらに慎重かつ徹底した追究が必要であることはいうまでもない。このことを筆者の今後の研究の課題として要望するところである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、1999年9月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。